

重戦車が行く

'08 秋

< 友よ >

初日：亀山市関町～松坂 40km

11月3日月曜日 10:45、JR 関駅に降り立つ。昨夜 7:00 に大分港をフェリーで出港し、阪神電車、大阪環状線、大和路線、関西本線を乗り継いで、はるばるここまでやって来た。

関町をこの旅の出発点に選んだのは、東海道の中でもここが一番好きだからだ。スマイルランで過去 2 回通過している。特に去年は 1 時間ドブプリ休憩した。茶屋で三石弁当なるものを食してごきげんだった。もちろんビールはね、当たり前だろ。重戦車の燃料を何だと思っているんだ。

旅立ちの 2 日前の未明、友が突然逝った。突然という言葉では表せないほど急な死だ。どこも悪いところのない健康な奴だった。やや風邪気味だったそうだが、前日に元気な姿を見ているだけに、まるでキツネに包まれているかのようなようだった。脳梗塞でもない、心筋梗塞でもない。これが俗に言うポックリ病ってやつなのだろう。

彼とは家が隣どうしで、鶴城高校野球部の先輩後輩の間柄だった。私より 5 歳年下で、甲子園初出場の時の主力メンバーであった。私は彼を「正人君」と呼び、彼は私を「一郎さん」と呼んだ。中学校の教頭をしており、どんな行事にも積極的に参加し、何を任されても厭わずにそつなくこなせる有能な奴。誰からも愛され、慕われるナイスガイであった。

私にとっては、普段はそれほど気にはならないが、いないと何故か落ち着けず、年に何回か酒を酌み交わして、年をとってもずっとこの関係を保っていきたいと思わせる奴だった。

どこかジジ臭く、パッチとステテコがよく似合い、庭木の剪定が趣味だった。土、日の朝は、決まって枝を切る鋏の音で起こされたものだった。カーテンと窓を開け、「正人君、おはよう」と言うのがしきたりになっていたのに、あの風景にはもう会えない。いまだに朝カーテンを開けてみるのだが、そこには広い庭と脚立があるだけで、鋏の音も聞こえないし彼の姿はない。虚しすぎる。

それなのに、私は敢えてこの出発点に立った。状況からすると、ここに来るべきではなかったし、来る気にもなれなかった。しかし、今ここにいる。それは、彼の死に方だった。突然死は、いつ訪れるかも知れない。明日は我が身かも知れない。「一郎さん、やると思った時にやっつけよ」と彼が言っている様な気がして、来る決心がついたのだ。

11:00、「正人君、行くで」と言って関駅をスタートした。この日のランは、彼に捧げるつもりだ。かと言って、ことさらの旅にすることはない。意気に感じて突っ走ったり、快走したりはしない。そんなことしたって、彼は喜ばない。飽くまで、重マエダ流でいく。「見てくれ、これが俺の走りじゃ。こうやって走れば苦しくないんだよ。」と。

装備は、春とは若干異なるところがある。まず、ランシューズだ。相変わらず、デソトのトライシューズだが、今秋は、カラーをネイビーにした。股間へのフィット感がたまらなく良く、股ずれや金ずれの心配はないし、息子の位置もピタリと決まる。穿いていて気持ちの良さ限りなしなのだ。帽子は、アシックスの黒にした。長時間の紫外線照射から、頭頂部

を守るためだ。これ以上、髪が少なくなるとはいけない。エアサロは、EXからDXに変えた。インドメタシンよりもフェルナピクの方が効くようだ。2~3回スプレーすると、たいがいの痛みは取れる。ジレットフュージョンも、今回から携行することにした。タイガーウッズが宣伝するやつだ。コンビニやホテルの髭剃りでは歯が立たない私の髭は、5枚刃のコイツでなら楽に剃れる。おまけに、小さくて軽いから荷にはならない。

関駅を出て、国道1号線を東に500mほど行き右折すると勧進橋を渡る。そのまま県道20号線を20km走ると、津市の県庁前で国道23号線と合流する。そこまでは何の変哲もない郊外地なものだから、正人君のことが脳裏から離れなかった。

いつだったか酒の席で、「一郎さん、偉いなあ。自分で生活を組み立てて、自由でいられて……」としんみりと言ったことがあった。誠実過ぎる性格故、昨今の教員汚職問題の中で思い悩み、ストレスをため込んでいたのではなかろうか。本当は、自由になりたかったのではないか。私みたいに発散できる性格であつたらなあ、せめていっしょに走ることができていればなあ。思いは尽きない、涙も止まらない。死んで花実が咲くものか、正人君。かわいい、奥さんと2人のお子さん(元マエダ塾生)を残して、無念だろうなあ。それでも、それでも、また日は昇る。私も、今こうして走っている。切ない。

津市に入ってから、歩道が広くきれいで走り易かった。三重県は、県北の四日市市や鈴鹿市に目がいきがちだが、津市は意外に都会で美しい街だと感じた。津市を通過し、10km余り南下すると松阪市に至る。初日の終点、松阪スーパーホテルは、松阪駅を1km越したところにある。16:00どんピシャリに着いた。

このホテル、一泊¥4890だが、フロントで記帳し、横の自動支払機で支払を済ませた後渡されたのは、一枚の紙だった。それに7桁の暗証番号が書かれている。なにそれ、これがルームキーの代わりだと。一番新しいものはカードだと思っていたが、ウーム、こんなもんまで進化しないでくれ。俺たち、エボナイト棒に付いたキーでええ。

500mのビールを片手にコインランドリーで洗濯を済ませ、旅で最も楽しみな晚餐に出向く。旅を重ねるにつれ、夕食だけはその地の名物を頂くことにした。私のジャーニーは、食と人との出会いが最大の目的だから、少々お金がかかってもいいのだ。旨いものを食べるために旅をする。そのために、なけなしの小遣いを貯めてきたんだ。朝、昼はコンビニおにぎりやラーメンで事足りるが、せめて夕食だけはパーっといこうというわけで、夕食→晚餐と改めたのである。

で、ここは松阪、とくれば牛肉。都合よく、ホテルの前に焼肉屋さんがありますわ。フロントマンに尋ねると、行列のできる焼肉屋だそう、その名も「一升瓶」。一人で焼肉というのも、気の弱い私には腰が引けるが、腹ぺこなので思い切って入ってみた。すると、肉が回転しちよるではないか。回転寿司ならぬ回転焼肉だ。カルチャーショックとは、こういうのを表す言葉だろう。田舎者は、新しい物には弱い。回れ右をして出て行こうとすると、店員がすかさず駆け寄ってきて、「名様！こちらでございます」と言ってカウンターに連れていかれた。しかし、座ってよく観察するといいシステムである。手元のボタンを押してカバーを開け、回ってきた好みのネタを取ってカウンターの炉で焼いて食べる。ビールやめしは店員が持ってきてくれる。「こりゃあ、一人でも気にならんわい」、田舎者は照れ屋だが、

慣れるのは早い。生ビール大2、めし大2とともに、焼肉をガツガツと腹に入れた。松阪牛だけに旨いのは確かだが、値段も高かった。タン3枚で¥400一、ミノ4切れ¥400一、ひれ肉100gが¥1200一、カルビー100g ¥1000一、とかで、やや出血を強いられたが満足。7:00にはホテルに戻り、7:30には就寝、「正人君、今日はありがとう。無事一日目をおえたぞ。明日も見守ってくれ。」と呟きながら眠りに落ちた。